

## 12 吉益東洞〈親試実験〉の背景として

## の金瘡——医史的概観

館野 正美

## 一、はじめに

吉益東洞のいわゆる〈親試実験〉とは、彼みずから  
 ……余四十年來所親試、実験也（『東洞先生答問書』）と  
 述べている通り、彼の医術・薬方の臨床的体験の積み重  
 ねを重視し、それを以ておのが〈医道〉の本質的な根柢  
 とす医学的思惟の表明であることは、既に言を俟たな  
 い所であろう。

彼のこの一句によって表明される所の彼の医学的思惟  
 が形成されるに至るには、大小さまざまなる要因が考え  
 られはする。いわく、当時の医師の無能さ、又いわく、  
 当時の疾病史的背景、更にいわく、彼の傑出した個性  
 ……。そこに今、更にもうひとつの要因としての「金

瘡”を付け加え、以てその医学的思惟の特質を明らかに  
 する手掛かりとしてみたい。東洞の〈親試実験〉の背景  
 としてこの金瘡は、きわめて重要な位置を占めているよ  
 うに見受けられるにもかかわらず、従来ほとんどかえり  
 みられなかったからである。（尚、この点については、東  
 京理科大学の遠藤次郎先生に、きわめて重要なご教唆を頂い  
 た。）

## 二、吉益東洞の〈親試実験〉

既に触れた通り、東洞のいわゆる〈親試実験〉とは、  
 彼みずから〈余四十年來所親試、実験也〉と明言し、又こ  
 れを補足する形で〈疾医之論薬也、唯在其功耳〉（『薬  
 徴』、自序）・〈悪空論而貴功実也〉（『与瀧彌八書』）・〈吾  
 党小子、慎莫惑病名医論、縱令誦解天下医書、暗記病  
 名、不能治病、則焉免此諺之譏〉（『古書医言』、卷四）等  
 と言われている通りの、彼の〈医道〉における、文字通  
 り根幹をなす医学的思惟であった。

陰陽五行説の理窟に泥み、又、失敗を恐れ、保身を計  
 る余り、積極的な治術を行使しようとしなない〈陰陽医〉  
 達に對して、それ相應の腕に覚えがある東洞が、真向か

ら反旗を翻えしたのであった。その東洞の依つて立つ所  
以が、彼のいわゆる「親試実験」であつたが、その東洞  
は、本来、金瘡の流れを汲む者であつた。

### 三、吉益東洞と金瘡

衆知の通り、吉益東洞の先祖は、かの金瘡医吉益半笑  
齋であつた。そして又、*「……悟太平之世、不可以武興、  
慨然誓曰、……必為良医、遂学医、……津祐順……金瘡  
産科之術、授之於先生」*（『東洞先生遺稿』所収「東洞先生  
行状」と言われる通り、東洞自身、若き日には金瘡の  
修得に励んだのであつた。

言うまでもなく、金瘡とは、本来、戦場において負傷  
した兵士の手当てを行なう、きわめて実践的な医術の一  
分科である。生死の境にある傷ついた兵士に対する、一  
刻を争う、的確な処置の修得が、東洞の「親試実験」の  
淵源のひとつをなしたのであること、これ又、既に言を  
俟たない所であろう。

かくして修得した金瘡の「親試実験」的医術を、更に  
*「……金瘡者外傷也、無病則不薬而可、……何分科哉、  
於是、……研究精論、遂廢陰陽五行之鑿說」*（前引、「東

洞先生行状」と、内科的な領域において展開してゆこう  
としたのが、外ならぬ東洞の「親試実験」の「医道」の  
本旨であつた、と考えられるのである。

### 四、おわりに

以上、吉益東洞の「親試実験」の淵源のひとつが、い  
わゆる金瘡にあつたであろうことを指摘した。最も直接  
的に人の生死を取り扱う金瘡の修得が、東洞の医学的思  
惟に与えた影響も、決して少なくはない所である。

ところで又、このような考え方の東洞のいわゆる「医  
司疾病、不司天命、唯尽人事」（「祭南部源侯文」という  
「天命説」は、遥か西方において「近代外科学の祖」と  
謳われるアンブローズ・パレの「*J'e le pansay, Dieu le  
suarit*」ということばと奇妙な一致を見せる。それぞ  
れ、金瘡医／外科医としての「親試実験」的体験のもた  
らす所ではないだろうか。

（北里研究所東洋医学総合研究所／日本大学文理学部）